



# 光星 4強届かず

## 土浦日大（茨城）に2-9

全国高校野球  
第105回選手権大会

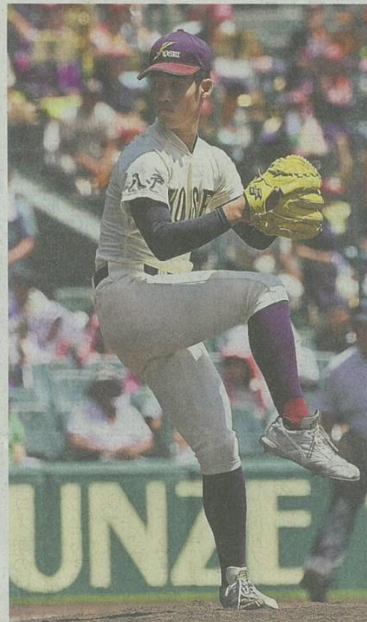
第105回全国高校野球選手権は第12日の19日、兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で準々決勝を行った。本県代表の八戸学院光星は土浦日大（茨城）に2-9で敗れ、3季連続の準優勝を果たした。2012年以来、11年ぶりの4強入りはならなかった。

【詳報13面、「悔いない8強」20面】  
八学光星は3点を追う4回、6番新城の内野ゴロで1点、5回も3番中澤恒の

内野ゴロの間に1点を返した。終盤にかけて逆転を狙った八学光星だったが、六回に長短打4本と2四球で

大量5失点。強力打線も六回以降はわずかに安打と沈黙し、反撃の機会をつくれず力尽きた。

（本田海輝）



2度のけがを乗り越え、甲子園のマウンドに立った八学光星の越智

### 2度のけがが克服夢のマウンド

#### リリースの越智

大観衆の声援を受け初めて立った甲子園のマウンドは格別だった。19日の準々決勝、3番手で登板した八

戸学院光星の越智琉介（3年）は、2度のけがを乗り越えてつかんだ夢の舞台だった。

1年と2年の冬に腰を疲労骨折した。骨折するたびに3〜4カ月の治療が必要となり、練習では球拾いなど選手を支える役割しかできず、「周りに置いていかれ

る」と焦る日々を送った。八学光星では中堅手としてプレーを続けたが、練習で打撃投手をした際、チームメイトが越智のボールを打ちあぐねた。仲井監督から「やってみろ」という言葉ももらい、2年の冬に投手へコンバート。最速134キロと「球速はない」と話すが、変化球を持ち味とする左腕に急成長を遂げた。準々決勝では2番手の後輩・岡本琉菜（2年）の不調を感じ取った。「次は自分だ。悪い流れを変える。だが九回に痛恨の本塁打を浴びた。「球場の雰囲気」にのまれてしまった。2イニングの登板だったが流れを変えられることができず「悔しい」と越智。しかし試合後は「背番号をつかんで甲子園のマウンドで投げたことは奇跡だと思う。楽しかった」と言い切った。

（棟方好華）